

受験番号						氏名	
------	--	--	--	--	--	----	--

国語

(100 点)
(50 分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は 16 頁ある。試験開始後、頁の落丁・乱丁及び印刷不鮮明、また解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
3. 監督者の指示にしたがって、解答用紙の該当欄に以下の項目をそれぞれ正しく記入し、マークせよ。

(1) 受験番号欄

受験番号を 5 ケタで記入し、さらにその下のマーク欄に該当する 5 ケタをマークせよ。（例）受験番号 20025 番→

2	0	0	2	5
---	---	---	---	---

と記入。

(2) 氏名欄

氏名・フリガナを記入せよ。

4. マークシートについて

- (1) 受験番号が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- (2) 解答は、解答用紙の注意事項をよく読み解答欄に H B 鉛筆で正確にマークせよ。
例えば

20

 と表示された問題の正答として ④ を選んだ場合は、次の
(例)のように解答番号 20 の解答欄の ④ を濃く完全にマークせよ。薄いもの、あるいは不完全なものは解答したことにはならない。

(例)

解答番号	解 答 欄
20	① ② ③ ● ⑤

- (3) 解答を修正する場合は必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色や消しくずが残ったり、 のような消し方などをした場合は、修正したことにならない。
5. 試験終了後、問題冊子および解答用紙を机上に置き、試験監督者の指示に従い退場しなさい。

第1問

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点50）

ある夏の日、そのときは突然やってきた。夕暮だった。当時私は盲学校の中学三年生だった。盲人野球のクラブ活動で訪れた富士山麓のグラウンドで、一心にボールを追いかけていた。ボールをホキユウする⁽⁷⁾ためには、「接近までの残り時間」に関する光学的情報、タウを利用しなければならぬ。当時、私はローヴィジョン（一メートル離れた人の顔のゾウサ⁽⁴⁾がわかる程度）だった。ボールの接近は数メートル離れた地点からなら見ることができた。しかし、そのとき、私の身体は課外活動の過労から、体力的な限界を迎えていた。ボールが正面から接近してくるのをぼんやりと見ていた。しかし、身体が動かなかった。ボールは正面から顔面に衝突した。視界が揺れた。水の入った水槽の水面が波立つように。しかし、それは一瞬だった。また以前と同じような景色が眼前に開けた。ボールはたしかに顔面、いや、眼球に衝突していたが、どうやらないしたことはなさそうだと安堵⁽⁸⁾した。

しかしそれは、束⁽⁹⁾の間の安らぎにしかすぎなかった。すぐに否定しがたい現実⁽¹⁰⁾に直面することになった。練習を再開したが、以前と違う何かに気づいた。ボールをホキユウできない。手を出しているのだが、なぜかボールが手の中に入らず、身体に当たる。視機能低下の進行はボールが急コウバイ⁽¹¹⁾を転げ落ちるように、思いがけずに速かった。

次の朝、目が覚めた。眼前が暗い。まだ夜かと思った。頭が冴⁽¹²⁾えてきた。ぼうつとした光が見える。夜ではない。朝のはずだ。自分の腕時計を見てみる。見えない。紺色の文字盤のはずだが、それさえわからない。まずいと思い、頭を上げ寝床から出ようとして身体が何かにぶつかった。二段ベッドの一段目に寝ていたので、天井に身体がぶつかったのである。壁も見えない。二段ベッドから這⁽¹³⁾い出た。周囲を見回す。ぼうつと光が見える。たぶん窓からの朝日だ。しかし、まばゆいほど強くない。歩いてみる。光に近づいていっても明るくならない。窓から見えるはずの景色がわからない。景色などという物体の精細な視知覚、外の景色の色彩の知覚はもはや不可能だった。私の視覚的世界は遠近構造を失い、ただの明暗から成り立っていた。光学的配列は存在しなかった。このときはじめて視覚を失うかもしれないと気づいた。程なくして、ほとんど明暗さえもわからなくなつて

いった。

朝、起床してから数時間経たないうちに、私は光と影さえも見えなくなっていた。失明したことをはじめて実感した。しかし、状況が把握できず、自分の身に何が起きているのか理解できなかった。自覚したことといえば、目が見えないことのみだった。疑いもない事実だった。もうひとつ、疑う余地のない事実があった。それは、視覚世界を感じなくても私は以前と変わらず生きているということだった。そう、視覚的自己を喪失しても、まだ何らかの自己が存在していた。そのとき、これまでは機能していないかのように感じられていた非視覚的自己が、

ア

なところから

イ

なところへ立ち上がろうとしていた。

視覚以外の残存感覚は、有機的な組織化へのプロセスがまだ始まったばかりだった。緊急手術後、リハビリが始まった。視覚に頼らずに日常生活をするための感覚訓練、街路を移動するための歩行訓練を開始した。リハビリは通学していた盲学校で行うことになり、通い慣れた学校の教室に入った。このときの印象はよく覚えている。久しぶりに会うクラスメイトたちの声がする。三年間も通い慣れたはずの部屋の中なので、隅から隅まで知り尽くしていると思ひ込んでいた。しかし、その知識は視覚世界の知識だった。視覚世界の情報源を利用していたにすぎなかった。友人の声がする。しかし、彼等までの距離感がつかめない。歩けば机の角に足を激しくぶつけ、横を向くといきなりロッカーに身体をぶつけてしまうので、身動きするのが怖い。窓があるはずだがわからない。触る物と音との対応関係がついておらず、まるで感覚がばらばらになっているかのようなのである。しかも、音の距離感がつかめないのも、奥行きのある音環境が私には存在していなかった。つまり、音環境の混沌である。新たな自己の変容が、この混沌から始まった。

今現在、私がタンチ^(注)している音環境は混沌ではない。混沌から構造へと移行した。そのときがいつなのか私には知るすべはない。あくまで回想的にしか推測できない。思い返すと、おおよそ半年経った頃には、通い慣れた盲学校の教室の中でロッカーや机に衝突することはなくなっていた。友人たちの声までの距離はおおよそわかったし、部屋が広いか狭いか、窓はどこにあるか、天井は高いか、そして窓にカーテンが閉まっているか否かまでわかるようになっていた。

この間、感覚訓練や歩行訓練は連日行われていた。感覚訓練では水道水がヤカンから溢れないように溜めること、ヤカンから

容器に水を注ぐことなどを練習していた。これらの課題では、水がヤカンや容器に溜まっていく際の音と手の動きの協応、言い換えれば聴覚Ⅱ行為カップリングを学習することが求められていた。歩行訓練では白杖を周期的にタッピングしながら目的地まで歩く課題を毎日に行っていた。タッピングによって白杖が路面と接触して発生する音から、多くの知覚情報をピックアップすることを学習していった。白杖と路面との接触は、音環境のサウンドテクスチャーを自ら構成するという役割を担う。白杖タッピングにより生成されたバーストは、その音そのものが路面の特性を反映している。加えて、周囲に非発音体（壁面など）が配置されていれば、反響音が到来する。白杖使用者は既存の音環境を自らアレンジしながら有用な知覚情報をピックアップしている。この意味で、歩行訓練もまた、残存感覚の使い方と身体の動きのカップリング学習でもあった。必要に迫られた視覚以外の知覚Ⅱ行為カップリングのカクトクがもととなり、音環境を混沌から構造へと変容させたのであろう。そして、そのことが新たな自己の確立に大きく寄与したことになる。

光を失うと真っ暗になるのか、という質問をよくうける。また、視覚が自己 (self) の準拠枠になっているのではないか、という疑問もよく寄せられる。しかし、両者に対する筆者の意見は否である。盲人は暗黒の世界を知覚しているのか。いや、暗黒の世界を「見て」いるのか。それはない。その理由は、光を感じない以上は暗さも感受できないからである。明るい、暗いという視覚的な主観的経験は **a** である。

同様に、自己の準拠枠としての視覚の役割もまた **a** である。筆者の体験では少なくとも失明後半年から一年半が過ぎると周囲の音が構造化されてきたし、自分自身の残存感覚同士が再組織化されたように思う。つまり、生まれてからの自己の準拠枠（生態学的に言えば *intermodal invariant framework*）のうち視覚的準拠枠を失ったため、一度自己が崩壊した。その後、知覚Ⅱ行為カップリング学習によって残存知覚システムの再組織化が起きた。結果、新たな自己の枠組みが残存知覚システム間にできあがったわけである。ジェームズ・ギブソンはエルンスト・マッハの概念を改変して視覚的自己 (visual self) の重要性を指摘した。視覚を喪失した自己の枠組みにとって、主役は少なくとも視覚的自己ではない。では何か。筆者の経験と推測では自己の準拠枠の再組織化の中心になるのは、聴覚的自己 (auditory self) さらには一般化するならば、振動知覚的自己

(vibratory self)であろう。視覚的自己においては、視野に自分の鼻など身体の一部が見えることが準拠棒として重要とされている。では、聴覚的・振動知覚的自己にとつて同じ役割は何か。それは、第一に左右の耳とそれに挟まれた頭部である。頭部の外側に環境音は通常定位 (localize) するように聴くことができる。また、環境音と聴取者の関係はこの頭部を準拠棒にする。

b である。

第二はさらに、聴覚的自己を敷衍^(注4)すると、振動知覚的自己であり、その基軸は頭部に接続している身体である。音波は媒質の振動にすぎない。聴覚細胞レベルで感受できない振動も環境音には同時に含まれる。低周波あるいは超高域音である。これらは、聴覚細胞から感受されるというよりも、身体の振動として中枢神経系にデンパン^(*)されるのではないだろうか。足から首まで続く筋骨格系は、耳では感受できない振動を伝達するであろう。さらに、胸部などは、頭部付近に到来した音波を反射させている可能性が高い。これらの身体の機能は振動知覚的自己の根幹なのではないだろうか。視覚的自己を喪失しても自己の再組織化に成功すると、聴覚的自己・振動知覚的自己が主役となり、環境内に盲人が定位する (orient) ことを可能にするのだ。

失明体験は生態心理学的な観点を熟考するうえで、十分すぎるほどのがかりを与えてくれた。加えて、自己概念を表象主義的な理論の独占所有物にしておくにはもったいないことや、自己概念は生命の持続という根本的な問題を扱ううえで重要であることを示唆してくれた。

(伊藤精英 「サウンドテクスチャー」 一部改変)

(注) 1 タッピング : コツコツ音を立てて叩くこと。

2 ジエームズ・ギブソン : アメリカ合衆国の心理学者 (一九〇四―一九七九)。

3 エルンスト・マッハ : オーストリアの物理学者 (一八三八―一九一六)。

4 敷衍^{ふえん} : おし広げること。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア) ホ|キユウ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 不足している材料をホ|ジュウする
被災地へのボ|キン活動
窃盗の容疑でタイホ|する
毎朝公園をサンボ|する
強度をホ|ジする素材

(イ) ゾウ|サ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ジサ|ぼけが治る
十年かけて運河をクツサ|クする
サ|ジヨウの楼閣
サ|ギョウが順調に進む
サ|モン委員会

(ウ) コウ|バイ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- バイ|シヨウ金を支払う
香辛料をハイ|ゴウする
細胞をバイ|ヨウする
温室効果ガスのハイ|シュツ量
会社の売り上げがバイ|カした

(エ) タン|チ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 科学的なチ|ケンを応用する
セイ|チな分析
システムのチ|メイ的な欠陥
法的ソチ|を取る
チズを見ながら観光する

(オ) デン|パン

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ハン|ヨウ性が高い
世論のシンパン|を受ける
ソッセンスイハン|して指導する
費用をセツパン|する
負傷者が病院にハン|ソウされる

問2 空欄

ア

イ

に入れるのに最も適当な組合せを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6

。

①

ア 主観的

イ 客観的

②

ア 無機的

イ 有機的

③

ア 身体的

イ 構造的

④

ア 潜在的

イ 顕在的

⑤

ア 視覚的

イ 聴覚的

問3

空欄

a

に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。ただし、

a

は二箇所ある。

解答番号は

7

。

①

構造的

②

抽象的

③

立体的

④

行為的

⑤

相対的

問 4 空欄

b

に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8。

- ① 残存感覚同士が再組織化されたから
- ② 視野に頭部と両耳が見えるから
- ③ 頭部と両耳との空間的関係は個々の人にとって不変だから
- ④ 聴覚と振動は接続しているから
- ⑤ 振動は聴覚だけではなく身体の振動として中枢神経系が感受するものだから

問 5 傍線部1「混沌から構造へと移行した」とあるが、「音環境」が「混沌から構造へと移行した」のはなぜか。その理由の

説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9。

- ① 聴覚Ⅱ行為カップリングの学習効果があったから。
- ② 視覚世界の情報を利用できるようになったから。
- ③ 音の距離感がつかめるようになったから。
- ④ 歩行訓練によって、残存感覚の使い方と身体の動きのカップリングを学習したから。
- ⑤ 感覚訓練が連日行われたから。

問 6

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① 筆者が生まれながらのローヴィジョンであったことは、視覚を失った後の生活を容易にした。
- ② 周囲の音が構造化されることと残存知覚システムの再組織化は密接な関係がある。
- ③ 振動知覚自己にとって、準拠枠は、視覚的自己にとって重要であったほどには重要ではない。
- ④ 聴覚細胞レベルで感受できない振動は、いったん身体の振動としてデンパンされた後に聴覚的自己によって処理される。
- ⑤ 自己概念の主役が視覚的自己であろうと聴覚的自己であろうと、生命の持続という問題を考える際には、大きな差はない。

第2問

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点50）

「あの人は自立している」と聞くと、どんな人をイメージしますか？ 親やパートナーに頼らなくても自活できるだけの経済力がある人でしょうか。または衣食住を自分で用意できる人でしょうか？ 自分の食いつ持を稼ぐ経済力がある人や、身の回りのことを自分でやる人のことを、私たちは「自立している」とみなしますが、この時に「自立」が何を指すのかは、必ずしもはっきり定まってはいません。

たとえばジェンダーによっても、「自立」は異なっており捉えられがちです。「自立した女性」という表現は、経済的・社会的評価の高い職業に⁽⁷⁾つき、親やパートナーに経済的に依存せずに生活している女性たちを指して使われてきました。一方、「自立した男性」は、自分の生活費を自分で稼ぐ男性を指すこともあるかもしれませんが、とりわけ最近ではそれよりむしろ、自分で身の回りのことができる男性という文脈で使われるのではないのでしょうか。これは、女性が自分の生活費を自分で稼ぐことが困難であったりそもそも期待されてこなかったりしたためでし、逆に男性は、経済的には「自立」し、かつ、自分の身の回りの⁽⁴⁾メンドウは誰かに見てもらえるのが当然だ、と思われてきたためと言えるでしょう。

フェミニズムでは女性の自立、特に経済的自立を重視してきました。父親や夫など男性親族の「保護」を受ける必要から女性を解放すると同時に、男性と同じく市民としての権利を女性たちが勝ち取るため、女性が自分の生活を支えて社会生活を送れるようになることは、重要な目標だったのです。財産管理権を女性の手に取り戻そうとした第一波から、男女賃金格差の解消に向けた今も続く闘いまで、女性の経済的自立の⁽⁷⁾カクトクはフェミニズムにとっての大きな課題でした。

私たちが生きる近代の資本主義社会は、女性にお金が入りにくい仕組みを作ってきました。家事や育児を含む家庭内における女性のケア労働は、「外」で働く労働力を生み出し維持する労働、つまり経済を根底で支える重要な労働であるにもかかわらず、その担い手である女性たちに直接対価が支払われることはありませんでしたし、家庭の外にあっても、しばしば女性に適していると思なされた介護や保育、看護などのケア労働は、無償労働の延長線上のように扱われ、低賃金に抑えられてきました。

これは実際に女性の経済的自立の芽を奪うと同時に、女性とはそもそも男性に「支えられ」「保護され」なくてはならない存在、「自立」できない存在である、という偏見を強め、女性たちを家庭内の無償労働にさらに強固に繋ぎ止める役割をはたしました。

そのような社会の仕組みは女性たちの経済的自立を困難にしますし、そのことは女性たちの生の選択を大きく制限することになりました。社会においてのみならず「家庭」においても女性たちが男性と同等の発言権と自由を手に入れること。それは、女性の人生の可能性や選択肢を広げることでありましたが、それ以前に、家庭内でのさまざまな暴力によって女性の安全や健康、生命すら脅かされることが少なくない社会において、彼女たちが生き延びるために使える手段を増やすことでもありました。

ただ、経済的「自立」であれ、それ以外の「自立」であれ、「自立」を追求しさえすればそれで良い、というわけではありません。「自立」が何を意味しているのか、「自立」の重要性を追求することが何に繋がるのかは、一度立ち止まって考える必要があります。私たちの社会においては、自立と依存が対立する概念のように語られることが多いのではないのでしょうか。けれども、まったく誰にも依存せずに自立している人はいませんし、私たちは誰もが何らかの形で他者に支えられ、他者の力を借りて生きています。

無償労働を通じて家庭と社会とを支えてきた女性を、その事実にもかかわらず「自立」できない存在とみなすことで、彼女たちの労働を搾取してきた——そんな社会のカラクリを、フェミニズムは明らかにしました。つまり、社会は男性による庇護に「依存」しているとみなされた女性たちの労働に依存することによって成立しているのに、社会を動かす中枢の位置を占める男性たちはその依存を認めることなく、「自立」した一人前の人間とみなされてきたわけです。

特定の依存の形式を依存と認めないことで限られた人々を「自立」した存在と位置付ける一方で、それ以外の人々を「自立」していない存在、従って社会において十全な権利の認められない半人前の存在とみなし、従属的な地位に留めおく——これが歴史的に女性の抑圧のひとつの形態であった以上、フェミニズムは単に「自立を目指そう、依存を抜け出そう」とだけ主張することではできません。「自立」「依存」という地位がどのような人々にどのように振り分けられてきたのか、それを分解し、見直す必

要があるのです。

「自立」を見直すこれと同様の試みは、障害者運動では「自立生活運動」などを通じて自覚的に行われてきました。自分の生活を支えるだけの収入を得ることが困難であったり、日常生活に介助が必要であったりする障害者は、しばしば、社会なり医療従事者なり家族なりに「依存」した存在とみなされましたが、これは、例えば本人の望まない形での病院や施設への収容を正当化するなど、障害者自身の意思と自己決定を軽視することに繋がります。自立生活運動は、そのような発想に対し、経済的な扶助を受けるか否か、日常生活で介助を必要とするか否かにかかわらず、障害者自身が自分の生活のあり方を選択し決定することこそを、「自立」としたのです。

骨形成不全症で電動車椅子を利用するコラムニストの伊是名夏子さんが、二〇二一年四月、旅行に出かけた際に下車を予定している無人駅に階段しかないという理由で「ご案内できない」と言われたとして、「乗車拒否されました」とブログで報告をしたところ、激しいバッシングを受ける、という出来事がありました。彼女は「高齢者やベビーカーユーザーにとっても同じ困りごとがある」として公共交通機関のアクセスの向上を求めたのですが、それに対して「わがまま」「モンスタークレイマー」「他人に頼らなければ生きていけない自分を恥じろ」などの誹謗ひぼうが相次いだのです。

けれども、エレベーターなどのない駅で階段での介助を依頼する車椅子ユーザーは「他人に頼」っているともみなされる反面で、数時間や数日かけて歩くこともできないのに目的地までの移動に電車を利用する人々は、「他人に頼」っているとはみなされません。どちらも「自力」だけで移動をしているわけではないのに、前者だけは「他人に頼」っていることを「恥じ」るべきと言われ、そのような人が自分の権利を主張するのは「わがまま」だ、とされてしまう。車椅子ユーザーは他人に頼っている、それに対して一般に電車を利用する人々は他人に頼っているわけではない、という

a

な区分をした上で、「他者のサポートを受けて生きている人間は、依存の自覚と感謝の念を持って大人しくしているべきだ」という要請がなされるのです。

このようにきわめて偏った、しかも一面的なかたちで「自立」と「依存」が振り分けられていく社会において、「自立」してない人とみなされ得る人たち——障害や病気を持つ人、生活保護を受けている人など——による権利の主張は、強い風当たり

を受けます。私はこんなに必死で「自立」しているのに、あの人たちはそういう私に依存していて、その癖さらに権利まで主張するのか、許せない、という形で、より「自立」していないとみなされる人々をたたいていく。そんなたたき合いにつながるような「自立」の強迫には救いがない、と思います。

¹ フェミニズムが女性の自立を求めなくてはならなかった理由は、すでに見た通りです。けれども、特定の自立を支える依存を黙認し、別の自立を支える依存を「迷惑」とみなす振り分け方を前提としたまま「自立」だけを追求するとしたら、それは、社会にすでに存在するさまざまな不平等や格差を温存したまま自己責任を問うことにほかなりません。必要なのは、「他人に迷惑をかけない」ことでも、おそらく必ずしも「自力でがんばる」ことでもないような「自立」を考えること、あるいは何なら「自立」しなくても生きていける社会を考えること、ではないでしょうか。

人生一〇〇年時代と言われ、メディアには八〇歳、九〇歳になっても、仕事も生活も趣味も元気に楽しむスーパー高齢者が登場します。それはとても素晴らしいことではあるけれど、それまでできていたこと、できるはずだと思っていたことができなくなる日はどんな人にもやってきます。そうなった時、ここまではできるけれどここから先はできない、ここはやつてもらえますか、ありがとう、と、自分の生をめぐって「自立」と「依存」のバランスが変わっていくことを、私たちはうまく受け入れていくのでしょうか。

これはとりわけ自分が「自立」していることを疑ったこともないタイプの男性には難しいでしょうし、そうでなくても、「他人に迷惑をかけない」ように努めてきた人には、他人の助けを借りる必要が大きくなることは、とても辛いことかもしれせん。けれど、成人家族全員がそれぞれ経済的に自立し、家事も分担してこなす、というあり方だけが、理想なのでしょうか。むしろその逆の方向、つまり、自分ができないことはできないと認め、互いにサポートの必要があれば依頼し、サポートできる場所では提供する、そのようなあり方に向けても、私たちは力を尽くすべきではないでしょうか。

一九八〇年代から続いた長野県の「ピンピンコロリ運動」²は、ぴんぴん生きて、寝付くことなく、家族にメンドウをかけずに、ころりと死ぬことを目指す、とされています。高齢になっても健康で「迷惑をかけずに」生を終えたいという希望を否定

するわけではありませんが、ともするとその希望は強迫的な「自立」志向、そしてそれと裏表にある、「自立」の減少や欠落への強い^(x)キヒ感に繋がります。「自立」の無理な追求は、ひとつ間違えば、老いや病を拒絶し否認し、老いたり病んだりした人々の生きる場所を奪うことになりかねないのです。

今の日本社会では、老いたり病んだりした人々を支え、あるいは子どもを育てる仕事は、まず血縁をベースとした家族に期待されています。しかし、一人暮らし世帯が全世帯の三八パーセントを占め、中年世代の未婚率も上昇傾向にある（二〇二〇年国勢調査）現在、家族のあり方は多様化せざるを得ません。家族というユニットにケアを担わせるシステムには、すでに限界がきています。ケアを家族ベースではなく社会に任せるシステムが構築される必要は今後いつそう高まるでしょうし、専門家の監督のもとでロボットが現場のケア労働を担う未来すら、もしかすると可能かもしれません。

ただ、そうなったら私たちは互いにケアやサポートをしあうような親密な関係を作らなくなるかという点、必ずしもそうではないかもしれない、と思います。その関係性は、現在私たちが馴染んでいる、血縁をベースとした親族関係の基本ユニットとしての「家族」とは、大きく違うかもしれません。けれども、身近にいて心の安定や精神的サポートを提供し合う人々、生活を支えるお金を稼ぐことや家事労働を担うことに限定されない形で私たちが「依存」し私たちに「依存」する人々を、少なくとも私たちの一部は、必要とし続けるのではないのでしょうか。

「○家の娘から△家の嫁になる」という^(*)キティルートから逃れるために、女性たちは「自立」を求めてきました。その重要性は今も失われていません。けれども同時に、「依存」か「自立」かという二者択一が、それ自体、偽の選択であることも、私たちは常に思い出しておく必要があります。「自立」の要請を、どうやって **b** に回収させないでおくか。「自立」しなくても一人の人間としての権利と尊厳をもって生きていける社会をどう作るのか。他者に依存し同時に依存される適切な形とはどのようなもので、それを私たちはどうやって身につけられるのか。フェミニズムは、「自立」の先に向けて、あるいは「自立」の再構築に向けて、考えていかななくてはならないのです。

（清水晶子 「フェミニズムってなんですか？」 一部改変）

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

11

15

。

(ア)

11 ツき

- ⑤ カンシヨウ地帯
④ フワライドウ
③ 目的がジヨウジュする
② 冷静チンチャク
① テンコの時間に遅れる

(イ)

12 メンドウ

- ⑤ 武器を捨ててトウコウする
④ トウイソクミヨウ
③ 専制君主として国をトウチする
② コウトウムケイ
① 彼は象徴主義にケイトウした

(ウ)

13 カクトク

- ⑤ ブドウをシュウカクする
④ ハカクの報酬が支払われる
③ ガイカク団体
② ランカクにより魚の数は減少した
① 長年のカクシツが解消された

(エ)

14 キヒ

- ⑤ キチの事実
④ キセキに入る
③ キンキを犯す
② シンキイッテン
① 能力以上の力をハッキする

(オ)

15 キテイ

- ⑤ ナイキに抵触する
④ 受付でキチヨウする
③ キシヨウ動物の生息地
② 最新の建築キジュンに従う
① 過労にキインする事故

問 2 空欄 **a** に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **16**。

- ① 合理的
- ② 相対的
- ③ 折衷的
- ④ 客観的
- ⑤ 恣意的

問 3 空欄 **b** に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **17**。

- ① 関係性
- ② 自己責任論
- ③ 相互依存
- ④ 資本主義社会
- ⑤ フェミニズム

問 4 傍線部 1「フェミニズムが女性の自立を求めなくてはならなかった理由」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **18**。

- ① 現代においても、財産管理権など市民としての権利を女性は制限されているから。
- ② 介護や保育、看護などのケア労働に従事することが、経済的に自立することと見なされてこなかったから。
- ③ 男性が経済的に「自立」するためには、身の回りのメンドウを見る女性が必要だから。
- ④ 資本主義社会が、女性の経済的自立を阻害し、女性の生の選択を制限してきたから。
- ⑤ 介護や保育、看護などのケア労働の多様化にともない、「外」で働く労働力が必要な社会になったから。

問5 傍線部2「ピンピンコロリ運動」の説明として適当とは言えないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① ピンピンコロリ運動には、家族に迷惑をかけずに生を終えたいという希望が込められている。
- ② ピンピンコロリ運動は、「自立」を強迫的に追い求めるあまり、老いや病を拒絶することに繋がりがねない。
- ③ ピンピンコロリ運動は、老人や病者を生きづらくさせ、生きる場所を奪ってきた。
- ④ ピンピンコロリ運動は、血縁をベースとした家族のあり方と関係がないとは言えない。
- ⑤ ピンピンコロリ運動は、一九八〇年代から続いてきた長野県の運動である。

問6 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 筆者は、なぜ無償労働に依存した社会を変える必要があるのか、明確に述べていない。
- ② 筆者は、原理的に、他人からの支えに助けられているものは「自立」ではないと明確に区分した上で、どのように「自立」することが可能か模索している。
- ③ 筆者は、経済的・社会的評価の高い職業に働くことこそが「自立」した男性の条件であると主張している。
- ④ 筆者は、「自立を目指そう、依存を抜け出そう」と主張するための前提として、「自立」「依存」という地位はどのような人々にどのように振り分けられてきたのかを解き明かそうとしている。
- ⑤ 筆者は、一面的に「自立」と「依存」が振り分けられていく社会ではなく、「依存」と「自立」の概念を捉え直し、誰もがゆるく支え合い、依存し合える社会を希求している。

